

ニッコリ笑つたような、あの特徴のある『M』の文字を見ると、なぜかちょっとホッとする。いかなる邊境、異郷においても、その見慣れた『M』の文字に接すると最低限の食事は確保されたといふわずかな安堵感が走るのだ。

しかしながら、この街の『マクドナルド』はちよつと変わっていた。

ドアを開け、一歩中に足を踏み込もうとしたとき、異質な空氣を感じたのだ。

店内のテーブルに座っている多くの人々が、いつせいにこちらを振り向いたのである。

客はみな白人だった。冷ややかな視線がこちらに向かってくる。

私は一瞬立ち止まつた。

すでにこのアメリカという国の人々、なかでもある種の白人が差別的であることを数多く経験していた。レストランなどで食事をとつていて、ふと目が合つた向こうのテーブルの白人が汚物を見るような視線でじつとこちらを覗きえていることがある。はじめのころはその意味がつかめず反射的に目をそらすことが多かつた。しかしその視線の意味に気づいてからは、私はその視線に抗つた。相手が目をそらすまで絶対に私は目をそらさなかつた。ただ、相手が差別的な視線を送つてくる場合、これまでの経験では彼らは私の気づかぬ死角から視線を送つてくる場合多かつた。

その日のマクドナルドのような直接的なものははじめてだつた。私はドアの前で立ち止まつた。

した。

しかしさせか私はそのまま、こんな光景を、いつかどこかで見たことがあるが、妙に客観的にその光景を見ていた。

私は奇妙なことに西部劇映画の一シーンを思い出していたのだ。

■  
荒野にて。

西部の、とある小さな町の居酒屋に、とつぜん他所者が現われる。

ドアを開けると、田舎の社交場にたむろする常連たちの視線がいつせいに彼へと集まる。

よくあるシーンだ。

このお決まりシーンは、ドアを開ける者の「見た目ショット」で撮られる場合が多い。カメラがなめる人々の視線には、警戒と警告と、そして排他的色が窺える。他所者はドアの前で一瞬立ちすくむが、やがて冷静を裝つて、カウンターに向かって歩みはじめめる。

私もそのようにした。

ゆづくりと歩きはじめた。

カウンターに向かって通路を歩む背中にそのときも多くの視線を感じる。

"……まったく馬鹿げたほど、あのドン臭い西部劇そっくりじゃないか

映画ではカウンターの前に立つ他所者が囁みつぶしたような声で「バー・ボン」と言うと、白シャツに黒のチョッキを羽織った、髪の長い頭の禿げあがつたマスターが、グラスに酒を乱暴に注ぎ込む。そして、まるで乞食にでも物を与えるように、グラスをカウンターの上に滑らせる。

「コーカンド ハンバー・ガーブリーズ」

私の注文はバー・ボンみたいに格好よくはない。

カウンターを挟んで対面している人間もただのファスト・フード・ショッピングの制服だ。  
たぶん彼女は黒人とは呼べないだろう。おそらく何代も前からの白人と黒人の混血で、わざ  
かにカラーが入っているが、その雰囲気は白人のそれである。悪い予感がした。近頃憎悪とい  
うべきか、この種の人間がしばしば黄色人種を目の敵にすることがあるからだ。  
そして、めでたく予感は的中する。

彼女は意地の悪い小学校の先生のように、単純な英語を私にリピートさせた。

頬をしゃくり、眉間に皺を寄せ、鼻を鳴らし、わからない、ヒラジエスチャー。

「コーカンド ハンバー・ガーブリーズ」

彼女の目をじっと見据えて、友好的にもう一度ゆっくりと繰り返す。

「バードン?」

彼女はわざとらしげに小首をひねる。

眉間から鼻にかけていびつな皺を寄せている。

まるで貝うものを見たかのように。

アメリカをはじめて旅する私が街で「マクドナルドはどうですか?」とアメリカ人に尋ねた  
としよう。たぶんアメリカ人は必ず何度も私の言葉を聞き返す。これは仕方のないことだ。日  
本語のマクドナルドほど原語と似ても似つかないものになってしまった言葉も珍しい。それは

M c D o n a l d という人の名前であり、農耕民族が烟を耕すような調子で言う、あのマクドナルドではない。"マック"の"ク"はほとんど聞き取れない。"マ"と言つたが早いが、素早く次の"ドナルド"に移る。"ドナルド"は"ダナルス"と聞こえる。"ダ"にアクセントがあり、"ス"がまた聞こえない。

これはほとんど別種の言語だ。

最初にマクドナルドのレッスンを受けたのは、ニューヨークの近代美術館においてである。別にそこでマクドナルドという言語に関する発音の講座を開いているわけではない。地階にマクドナルドがあるというので、廊下で館員らしい老婦人に道筋を尋ねたのである。彼女は手に持った額吊り用の棒を強く握りしめ、首を右に三〇度傾け、顔を激しく歪めながら私の言葉を聞き直した。実に一〇回以上もある。これは拷問に等しい。しかし彼女の場合は私の変わった英語に刑罰を与えるとしたのではなく、律儀に理解しようと努力した結果が、そのようなオババな態度となつたのだ。

私は仕方なく、自分の掌にボールペンである特徴のあるMの文字を書き、さらにその横に湯気の立つハンバーガーの絵も描いた。「これはあつたかいんだよ」と言いながら湯気を描いているとき、とつぜん彼女は「オーライエース」と大きな声を出した。そして、「マック・ダナルス」

328

と廊下に響きわたる大音とともに、棒を地面に突き立てて言った。

「ヒヤーリズ ヒヤーリズ (ここにある、ここにある)」

マクドナルドはどうか知らないが、"ハンバーガー"および"コーコー"という言葉を他者に通じさせることができないから、アメリカでは生きていくことができない。実際に私は旅行中には二〇〇回以上はこの言葉を使つてきた。そして、日々かなりスマーズにコーコー・アンド・ハンバーべーを手に入れた。だからカウンターの向こうの女がわからないという態度に出たのは、明らかに嫌がらせである。

三度尋ね返してきたとき、それまで抑えていた怒りが吹き出した。

しかし、ぐつと抑えた静かな調子で言う。

「さのうアフリカからやつてきたのかな、あんた」

差別語ありありの愚弄である。我ながらいわにょくされたと思う。

女の顔色が変わった。彼女は私のいたつて簡単な英語を理解しなかつたにもかかわらず、それよりも何倍か複雑な英語を即座に理解したのだ。彼女はメモと鉛筆を投げ出し、こちらを睨

みつけ、押し殺すような調子で「シット（くそ）」と言つた。不潔な女だ。彼女はそっぽを向いた。そして、ちらりと入つて来た別の客に注文同じの合図をする。

私は彼女の隣り横の白人の店員にあらためてコート・アンド・ハンバーの注文をする。白人女は一部始終を知つていながら、無表情を装つている。そして東にさりげなく、そしてかなり冷やかな態度で注文品をカウンターに置く。

私はそれを受け取つて、テーブルに向かう。

人々の根線は、ドアを開けたときのように露骨ではなかつた。しかし、それとなく私の行動を注視しているのがはつきりわかる。

330

"……奇妙なマクドナルドだな"

私は怒濤の空いているテーブルに腰をおろし、コートで喉の渇きを癒しながら思う。

"この敵意に満ちた店の空気はいつたい何なのだろう……"

最初に思い当つたことは、街のカラーを私が乱しているということだ。カラーとは皮膚の色のことである。この新興の街は一つの色によつて塗り込められていた。まのうのタ方ショッピング・モールに入ったときもそうだった。雑多な人種の入り混じるアメリカの街と比べると、

そこに入りする人々はおそらく单一だった。ホワイト・オンリーということだけではない。その階層、雰囲気、知性の程度、服装、ペーススタイル、身のこなし。そのすべてが单一に見えた。その中に入った黄色人種の私は妙な違和感を覚えたものである。そこでも根線を感じた。しかし、このマクドナルドの中の雰囲気はさらに特殊だ。まるで異人種御法度のサロンでもあるかのように、そこには排他的雰囲気が満ち満ちている。

私は苦いヘンバーがーを口にしながら、何かここには理由があるのではないか、と考えていた。そのときふと私は、アメリカにおいてこのマクドナルドという店に入ったときに常に感じてきた、ある小さな違和感のことを思い出す。

331

マクドナルド

ケンタッキー・フライド・チキン

デニーズ

ピザ・ハット

ダイナース

ワッフル・ハウス

シェーキーズ  
ウェンディーズ  
アービーズ  
ピッグ・ボーイ  
ココス  
ピクトリア・ステーション

サードイラン

さまざまな地域で、さまざまなファスト・フード・ショップを訪れた。

それが好みというわけではない。

ここアメリカではファスト・フード食品を避けて長い旅をすることはできない。

そのように数多くのファスト・フード・ショップを利用する過程で、私はある小さな事業に気づかされる。当然私はそれまでファスト・フード・ショップのみならず、ホテルのレストランから、かなり個性のある個人経営のレストランまでさまざまなレストランに出入りした。しかし思い起こすに、なぜかマクドナルドやデニーズのような無個性なフード・ショップに入つたとき、私は無意識に軽い緊張を覚えていたような気がするのだ。

不思議なことではある。日本での経験とは逆だった。

日本のマクドナルドやセブン・イレブンなどのように接客がマニュアル化された空間に入つたときほど、ある意味で気楽なことはない。人格と人格の触れ合いがないからだ。「私」は他者への配慮や他者からの私への個人的な気づかいを意識することなく、個室にでもいるかのように、そこでは一人の感覚のままであることができる。

しかし、アメリカでは逆の感覚が私を襲つた。

かりにマクドナルドを例にとるなら、アメリカでその店に入つたときほど、他のいかなるレストランに入つたときより、黄色人種である自分というのを意識させられるることはなかつた。たぶんその理由の一つは、薄々気づいてはいる。

つまり、複雑な価値観や民族が入り混じる多民族国家のアメリカの街において、マクドナルドほど純粹にアメリカ的空间はないのだ。それはアメリカという国の中にある、さらなる『純アメリカ国家』であるとする言える。

その空間にアメリカ粹主義を感じる理由はいくつもあるが、その一つはマクドナルドにアジア系やヒスパニック系の店員が見当たらぬといふことだ。

それはおしなべて白人であるか黒人である。シカゴでは全部が黒人の店員という何か別世界のようなマクドナルドに入つたこともある。当然白人オンリーもあれば、白人と黒人のミックスもある。私にはそれがアメリカ・マクドナルドの隠されたボリシーなのかどうかはわからぬ

い。ひとつすると黄色い人種が店員を務めているところがどこにあるのかもしない。ただ、少なくとも旅の中における経験では、黄色や褐色は一人もお目にかかることはなかつた。おそらく過去、私が訪れたマクドナルドの数はゆうに五〇を越えているだろうから、これはかなりのことだ。

白人と黒人とは、この国が形成される初期の段階からアメリカ大陸に移住した原アメリカ人といふ人々である。比較的最近になって参入した、アジア系やヒスパニック系を彼らは歓迎しているようには見えない。アメリカ人の才能、文化、スポーツの分野で白人や黒人のスターは輩出しても、黄色や褐色が出ないのは、そのなによりの証拠である。かりにこそしば題になるイエローが出たとしても、それはピーローとしてではなく、日々の話題に色を添える道化役にすぎない場合が多い。

その黄色や褐色以外の原アメリカ人のみが店員を務めるマクドナルドという巨大な外食産業。その純アメリカともいふべきレストランの供する料理が、一般にシンプルで不味いとされるアメリカ料理の食味に一致している事実は興味深い。アメリカの食が空虚である、というあの永遠の謎を解く一つのキーが、ひとつするとそこに隠されているかもしない。

アメリカ料理の不味さの理由については言説がないわけではない。一等有力な言説は植民地時代の君主国がイギリスであったことがわざわざしているという考え方である。確かに世にフ

rans料理やイタリア料理があつてもイギリス料理というものがないに等しいように、私自身もイギリス本国のレストランでなにか美味しいものを食べたという記憶がない。特にロンドンのあるレストランで最初に食べたスペゲティにはおそるべきものがあった。そのスペゲティはゆですぎで麺の形状がすでに崩れ、フォークで持ち上げるといくつかの団子になつたのである。それにかけるソースがどんなものであつたか思い出したくもない。

イギリス料理が不味いのは一説にはアンクロ・サクソンの舌の味蓄（味を感じる器官）が少ないからだと言われる。その伝統を引き継いだがゆえにアメリカ料理は不味いという言説は経験上無視しがたいものがある。

もう一つにはアメリカがピューリタニズムを徳義とする社会であつたから食味が発達しなかつたという言説もある。性的快樂と同じように、食の快樂は旧世界の退廃を意味するというピューリタニズム的解釈にのつて彼らが食味を追求しなかつたという考え方である。

確かに食味の不味さを禁欲に置き換えてアメリカの習俗を眺めた場合、性的快樂に関して彼らが禁欲的であるとの同様のことが食卓の上にも起つたといふことはあながち考えられないことではない。たとえば一般的に私たちはアメリカとくればセックスを連想するほど性的退廃を思うのが常だが、性的退廃はアメリカの都市の一部で進んでいるに過ぎず、その情報が過大に報じられているだけなのである。私はアメリカ内陸の普通の街に性風俗が皆無に等しいのを